歴史發展の動力としての人口

南亮三郎

小引

本文は、昭和八年十二月上旬第二回社會政策會議のため上京中、上田博士の主宰せらるゝ人口問題中心の『日本經濟研究會』において述べることをゆるされたる一夕の座談を、多少布衍もし資料をも増し加へて、私自からが後日にそなへんがため書き綴つてみたものである。けれども本來が速急に纏められた座談にその端を發するところへ、さらにこのテーマには、と云はうよりも私自身には、どこかに無理があると見ゐて、特に結論的部分は幾度びもの逡巡なしには草し得なかつた。改めて想を錬り直ほす日を期したいものである。それにつけても、座談の當時、熱心なる研究會同人諸氏が忌憚なく加へてくれられた質義と批評とは、本文を草する上に絶ゐず參考となり、また或る部分においては大いなる示唆ともなつたので、この點、上田博士以下同人諸氏に深謝の意を表せねばならない。（昭和九年一月一日の曉）

一、序說——日本における人口論議再燃の特殊的契機に關聯して

周ねく知られてゐる『世界經濟年報』の著者は、極東における謂ゆる滿洲＝上海事件の突發後間もなく、その當時から再燃し出した日本人口問題の論議に、次のやうな觀測を下だした。

「日本の諸支配階級の帝國主義的××政策を美化する根據として、いつもながら日本における人口過剰、增加人口を自國内で養ふことの不可能、植民地獲得の必要が、唱へられてゐる。

「日本人が一般に流布せしめることができた人口過剰の理論は、彼等の帝國主義的擴張政策の美化に役立つてはゐるが、しかしそれは決してこの擴張政策の原因ではない。……

「人口過剰が日本の帝國主義的××政策の原因として何の役割をも勤めてゐないといふことは、日本からの外國移住が少しもないといふ事實が全くはつきりと示してゐる。……」(1)

(1)『世界經濟年報』第十七冊　一九三二年第一四半期　七―八頁。

この觀測が肯綮にあたれるか否かは別として、ともかくも日本の「過剰人口」問題が這般の事件を契機として再び頭を擡げて來たこと、そればかりでなく同事件の突發そのものを日本の人口增加に歸せしむる論者の鮮少でないこと、は疑ひのない事實である。いま私の偶目せる一二の代表的意見を示すならば、たとへばこゝに津村博士の『非常時日本の財政及經濟』といふのがある。その一節に曰く、

「今の世の中に、延びないといふことは、其の實、延びないだけのことではなくて、縮まるといふことだ。日本が此上縮まつては、どうする。日本の人口は既に九千萬人以上だ。本土だけでも、年々百萬の人口が增加

する勢だ。平均一方キロの土地に、百七十人からの人間が密住してゐるのだ。こんな窮屈な國が他にあるか。イギリス並でゆくと、今の日本の十倍以上の土地、アメリカ並でいつても、やはり今の日本の十倍の土地が入用なのだ。だから、日本が延びるといふことは、自然の趨勢で、當然の運命だ。滾々として湧き出る大噴井の水は、終に溢れ出でゝ、そのあたりの土地を浸し、侵すが如きものだ。日本といふ大噴井の水が、東の側は、アメリカの排日で出口を塞がれ、南の側は、白人濠洲で、その出口を塞がれたからには、北の側は寒いから、せめては西の側、アジア大陸に、差當つての溢れ口を求むる外ないぢやないか。これは議論ぢやない、物理だ。物理學の法則が働き出して、今回の滿洲問題を突發せしめたのだとも謂へる。」(2)

(2) 津村秀松『非常時日本の財政及經濟』昭和八年刊　一五七―一五八頁。

だが、より注意すべきは、先き頃『日本人口問題研究』といふ一書を編み・なほ續いて同問題のより深き研究に專念せられつゝある上田博士が、その書のなかで極めて卒直に問題の起りを述べて居られる個所である。すなはち博士は夙に日本の人口問題に着眼し、その國際的危險性に世人の注意を喚起せられたのは早くも昭和二年の春のことであつたが、人口の量的增加といふ點のみからではなく・その質的變化――年齢構成の推移――の上から、すなはち「過去二十年間出産率が上り坂にあつた國においては、今日以後の二十年間に勞働年齢に達するものゝ數は年々增加するに相違ない」との一洞察から、「人口と産業との釣合」といふ意味における問題を日本當面の重大問題として究明を開始せられた直接の機緣は、まこと滿洲事件に外ならなかつた。博士

は曰ふ、

「前記の如き問題（人口と産業と釣合の取れない時代が現に我國に來てゐるのではないか、少くとも將に來らんとする恐れがありはしないか、との問題――南註）を私が考へ出したのは古いことであるが、最近になつて特にこれについて關心を深くするに至つたのは滿洲事件の突發である。即ち滿洲事件は人口の壓力に依つて促されたといふ見方をしたのである。」(3)

「昭和二年に私は人口增加の國際的危險性を考へてゐたけれども、五年後にその危險性が實際問題になるとは豫想しなかつた。しかし現在ではまだ戰爭が起つたのではなく、國交上の危險が來ただけである。戰爭を如何にして避くべきかゞ內外政治家の課題であり、又諸國民の課題である。そこで私としてはこの國交上の危機の根本的原因と、自分が推定する所の我國人口問題の眞相を研究せねばならぬと考へた次第である。」(4)

(3) 上田貞次郎編『日本人口問題研究』昭和八年刊　五二頁。

(4) 同上　五五頁。傍點いづれも引用者。

かやうに上田博士は、滿洲事件の主動因を「人口の壓力」に見、それが同時に「國交上の危機の根本的原因」をなすものと「推定」せられた。むろん私のこの一文は、右と類似の考へ方にその直接の動機を有するのではないが、かねてより一民族の歷史的發展とその民族の人口運動との間に一定の關聯の存すべきを想ふてゐた私にとつては、上田博士の所見は極めて興味ふかきものがあつた。なぜならば、滿洲事件は日本民族の發展史上

における單なる一つの出來事に過ぎないのではあるが、この出來事の動因を「人口の壓力」に見るといふことは、私の心ひそかに想ひ浮べつゝあつた歴史發展と人口運動との關聯についての、一つの具體的、特殊的な說明に外ならぬと思はれたからである。

そこで私は試みに問ひを立てゝみたい。一の時代から他の時代への・或ひは一の社會から他の社會への・歴史的發展に對して、人口は一體、どういふ役割を演ずるものであるかと。これはまた、人口は如何なる意味と範圍とにおいて歴史發展の動力として考察され得るか、といふ問題にもなる。本文は即ちこの問題への回答のための何等かの手懸りを求めようとしたものであつて、おそらく今は僅かに、若干關係文獻の詮索以上には出で得ないであらうけれども、もしもこの問題が究明せられ得て人口を顧慮しての歴史發展の理論が礎立せられ得るならば、それはヴァルガの謂ゆる「帝國主義的擴張政策の美化」以上に役立つことだけは確かである。

二、マルサスの歴史研究と「退歩的及び進歩的運動」の思想

あらゆる人口問題の論議が、多かれ少なかれ、或ひは又良かれ惡しかれ、マルサスの所論との關聯に於いて說かれるが如く、歴史發展の動力として人口を考察する場合にも、文獻史的には一應マルサスにまで溯ることが順序であらう。事實マルサスは、人口と食物との關係のうちに彼れの問題の本質を掴み、そしてこの見地か

ら人類歴史の、過去・現在及び未來にわたつての發展諸段階を考察した。從つて彼れの研究は全體として、人口問題の見地よりする人類歴史の一説明とも見ることが出來るのである。

この見方から、何よりも先づ重要と思はれるのは、『人口論』――その最終の第六版について云へば――の上卷を成してをる第一編と第二編とであらう。この二つの編は人口問題の歴史編とも稱すべきものであつて、彼れの謂ゆる人口原理が歴史的に立證されようとしてゐる部分である。詳言すれば、彼れの立てた例の三つの命題――

一、人口の增加は必然に生活資料によつて制限される。

二、人口は、ある有力顯著なる障碍によつて妨げられざる限り、生活資料の增加するところでは、必ず增加する。

三、これ等の障碍、及び人口を生活資料の水準に抑止する障碍は、道德的抑制、罪惡及び窮乏に歸する。

の中、第一は自明のもの・從つて證明を要せざるものと考へたが、後の二つの命題は過去及び現在の人間社會についてそれぞれ立證されるを要するものと見、それを企てたのが右に謂ふ二つの歴史編に外ならぬのである。すなはち第一編は原始民族及び古代社會を、第二編は近代社會を、詳密に討尋してゐる。

ところで、右に掲げた三つの命題を通じて我々に觀取されうるのは、マルサスが「人口」を passive なものと見、被規制者としてゐることである。これに反して「生活資料」「食物」が active なものと見られてゐる。す

なはち右の三命題を約めて云へば、人口は三種の障碍によつて食物の範圍内に抑止せられ・食物範圍が擴大する場合にのみ人口は新たなる水準まで增加する、といふのであつて、人口と食物との關係では後者が決定的と見られてゐる。從つてこの命題の關する限りでは、人口が逆に食物に働らきかける一面があらうとは思はれない。――序でに附言するが、近時マルサス研究家のうちには、マルサスの歴史的説明の見地を「人口史觀」と名づける人もあるが、右に述べたやうな意味で私はむしろ「食物史觀」と呼ぶ方が、より適切ではなからうかと考へてゐる。

けれども二つの歴史編に就いて見ると、單に、與へられた食物範圍の大きさが自然法則の冷酷さをもつて人口增加を抑止する側面ばかりではなく、逆に人口の不斷の增加傾向が食物範圍の擴大に働らきかける側面が説かれてあるのを人は見遁がすまい。そしてこのことは、第一版についても同じことである。たとへば右の第一の側面を要約强調したものは次の一節で、これは初版と最終版とで字句の上にも殆んど變りなきものである。曰く、

「……まことに神の力といふ直接の原因がなければ、一塊の石と雖も落下するを得ず、一本の草木と雖も萌え出づるを得ないと信ずることは、最も自由なる哲學の精神と一致する。けれども我々は經驗によつて、自然と呼ぶものゝ諸作用は常に一定の法則に從つて働らくものであることを知る。從つて人口を增加せしめ或ひは減少せしめる諸原因（the causes of population and depopulation）も恐らく、我々が知つてゐる他の自然法則の

如く、開闢以來不斷に作用しつゞけて來たものに違ひない。

「兩性間の情慾はいかなる時代でも殆んど同樣であつたと思はれるから、それは常に、代數學上の言葉で云へば、與へられたる量であつたと考へてよからう。一國の人口がその生産し又は獲得しうる食物以上に增加することを阻止する必然といふ大法則は、我々が一瞬間も疑ふことの出來ぬほど、我々の眼前に展げられた・我々の理解力にとつて明々白々の事實なのである。……」(6)

(6) Malthus, Principle of Population, 6th ed. Vol. I, pp. 529—530. 神永氏譯 春秋社版 三五二頁、伊藤寺尾兩氏譯 岩波書店版 上卷五九六—五九七頁。—— Cf. 1st ed. pp. 127—128. 高野大內兩氏譯 同人社版 一一七—一一八頁、谷口氏譯 弘文堂版 一一五—一一六頁。傍點引用者。

しかるに他方、人口の增加が食物範圍に働らきかける側面については、たとへば次の如き叙述がある。すなはちマルサスは原始及び古代社會の移植民に關聯して曰く、

「人類初期の移住及び植民の歷史は、彼等を驅つて斯かる擧に出でしめた動機と相俟つて、人類が生活資料以上に增殖せんとする不斷の傾向を有する事實を、顯著に例證してゐる。この種の何等か一般的法則なしとすれば、畢竟この世界に住民は分布しなかつたかも知れぬ。人間自然の狀態はまさしく懶惰であつて、勤勉活動では無いやうに思はれる。そして後者は、たとひ一旦發生せる後においては、習慣により、またはこれに基づいて形成せられた新たなる結合により、または事業の精神、戰捷の渴望等によつて繼續さるゝことはあるが、しかも始めに必要といふ强烈なる刺戟物 (the strong goad of necessity) がなかつたならば、決して發生した筈は

ないのである。」(7)

(7) Malthus, Principle of Population, 6th ed. Vol. I, p. 92; 岩波版上卷一〇五頁、春秋社版　六三頁。但し後者は martial glory（戰捷）を material glory（物質的云々）と誤讀せる如し。傍點引用者。

右は單なる一例示に過ぎないが、そこには明日に、絶えず增加する人口に應じて生ずる「必要」が「勤勉活動」に對する「刺戟物」となつて食物範圍の擴大を促進するに至るべき一面が、承認せられてゐる。この思想は、すでに第一版の終りの二章において、多分の哲學的・神學的彩りをもつて描寫せられたものであつて、そこには、「必要は發明の母」とも記され(8)、また「これ等の刺戟物 stimulants を人類大衆より奪ひ去つては、一般的破滅的嗜眠狀態を現出しないとは限らない、而して若しそんなことが起るならば、人類未來の進步の胚子は悉く破滅である」(9) とも述べられてゐる。

(8) Malthus, Principle of Population, 1st ed. p. 358. 同人社版　三二四頁、弘文堂版　三二三頁。

(9) Malthus, ibid. p. 359. 同人社版　三二五頁、弘文堂版　三二四頁。

これによつて見れば、マルサスの思想のうちでは、人口增加には二つの側面が認められてゐた。すなはち人口增加が現存の食物範圍內に阻止せられるといふ passive な一面と、それがまた食物範圍の擴大を促進するといふ active な一面とが並び存してゐるわけである。しかも注意すべきことは、マルサスが、この二つの相反する側面を相互に何等の關係なきものとしてではなく、一つの連續せる・周期的に繰り返へす運動として把握

してゐたことである。彼れがコンドルセーに倣つて、幸福（或ひは人口）に關する「退歩的及び進歩的運動」retrograde and progressive movements と呼び、または簡單に、人口の「擺動」oscilation と稱してゐるのがそれである。今は冗長を虞れて關係章句（10）の引用を略するが、歸するところこの運動は、今日の社會狀態のもとでは次の系列において反覆するものとせられてゐる。……人口の增加——與へられた食物範圍との均衡の破壞——窮乏の深化・賃銀の低落——人口增加の阻碍（＝退歩的）——生產の刺戟——食物範圍の擴大・新たなる均衡の恢復——人口壓力の弛緩（＝進歩的）——再び人口の增加……。

（10）Malthus, Principle of Population, 6th ed. Vol. I, pp. 17—19; Vol. II, pp. 6—8. —— Cf. 1st ed. pp. 29—31; pp. 150—154.

けれどもマルサスは、右の「退歩的及び進歩的運動」が周期的に繰り返へすと說く場合、どの程度の重要さを「進歩的」側面に認めてゐたのであらうか。むろん彼れが退歩的・進歩的兩側面を合して一つの連續的運動と把握してゐたからには、その一つが重視せられて他が輕視せられるといふことはあり得ない。しかし我々の眼前に橫はれる現實の歷史は、一方にその發展、他方に人口增加、を指し示してゐる。人間社會は發展し、そして同時に人口は增加したのである。この事實を前にして、それを、右の兩面の運動から說明するためには、「進歩的」側面をより重視せねばならない。マルサス自身も、むろんこの運動を絕えず同一の平面において繰り返へされるものと考へてはゐなかつた。運動の形態は同一であるけれども、人口對食物關係の新たなる均衡

が恢復される毎に、その何れもが增大せる狀態が現出するものと容認せられてゐる。恰かもヘーゲル的辯證法にとつて、より低き段階からより高き段階への、これを一言にして發展の、概念が本質的であつた如くである。從つてマルサス自身の思想を徹底せしめても、人口增加は絶えず進退兩面の周期的擺動を經過するけれども結局は、人口對食物關係によつて表示せらるゝ人間社會を發展に導くと謂ひうるのではあるまいか。

マルサスはしかし、この結論には達しなかつた、また達し得なかつた。なぜならば、彼れの『人口論』特にその歴史的實證編は人口增加が、從つて人類の幸福への進歩が、過去及び現在の社會において如何に阻害されてゐたかを討尋するにあつたからである。それ故に我々は、進歩的側面を認容する章句に尠なからず出くわすとはいへ、彼れの論述からは全體として、陰鬱なる退歩的側面の强調としての印象を受取るのである。要するにマルサスは、突きつめれば新境地の拓かるべき重要なる一思想を把持してゐながら、一には「天然の吝嗇と人間の夥多」といふ當時の特殊事情に、また一には彼れ自身の歴史科學的知識の局限性に制約されて、つひに人類の歴史を陰暗の色に塗りあげてしまつたのである。

三、エルスター及びモムベルトの發展觀

マルサスと同時代、及びそれ以後において、前述の如き人口の進歩的側面を强調した論者は決して少しとしない。特に顯著なるものには、前にはオイゲン・デューリング(11)あり、近くはアメリカのパッテン(12)があ

つたと記憶する。けれどもこれ等の論者は、人口對食物の關係についてマルサスと反對の命題を立てようとしたに止まり、歴史發展と人口增加といふ我々の當面の問題には觸れてゐないのである。この問題については、モムベルトは最近の大著『人口論』のなかで代表的な諸論者、たとへばコヴァレウスキー、ラウマー、シュミット、ゾムバルト等々を指摘してゐるが(13)、私がこゝで先づ擧げたいと思ふのはエルスターの所說(14)である。

(11) E. Dühring, Cursus der National-und Sozialökonomie, 4. Aufl. Leipzig 1925, S. 98 ff.

(12) Patten, Essays in Economic Theory 中に收錄の人口論文。

(13) Mombert, Bevölkerungslehre, Jena 1929, S. 12—16.

(14) Ludwig Elster, Art. Bevölkerungsproblem in : Handwörterbuch der Staatswissenschaften, Bd. II, 4. Aufl. S. 812 ff.

『國家科學辭典』中のエルスターの一文『人口問題』は、「諸民族の歴史は場所と食物とのための永久の鬪爭である。最古の時代から現代に至るまで、その畫面は依然として同じい。」といふ一句をもつて始まつてゐるが、その所說はほぼかうである——

場所と食物とのための鬪爭は先づ最初、しかして特に明白に、民族移動の姿をとつて現はれる。それは啻に我々の歴史時代においてばかりでなく、有史以前の時代においても强烈に現はれた。しからば何が彼等をして斯く、國から國へ、地方から地方へと移動せしめたかと問へば、エヂュアルト・マイヤーが唱破したやうに、「その發條はこの場合、より富裕なる、より住み心地よき地域への憧れや略奪欲ではなく、むしろ、元の住地

とその生産物とが、増加する人口を充分に養ひえないとの激しい窮迫である。諸狀態が原始的であればあるほど、ますます容易にこの窮乏が現はれ、そして益々ひどくそれが感ぜられるものである。」

その一例としてゲルマン民族の移動の跡を尋ねると、彼等が史上に現はれたときは、半開民族であつた。尤も彼等は遊牧の民ではなかつたが、農耕を組笨な形で行ひ、家畜の勞働力を耕作に用ひたところの、極く移動し易い民族であつた。その土地はふかい山嶽をもつて取りかこまれ、從つて人口に對しては僅かの維持力しかもつてゐなかつた。極く制限された必要だけが、やつと滿たされうる狀態であつた。人口數のあまりに强烈なる增加は彼等の生存條件を困難ならしめ、土地はその窮迫を支へ得なかつた。故に彼等は人口の過剩部分を次の二つの方法によつて處分した。嬰兒・病弱者・老衰者を殺すことがその一、人口の一部分を他地へ移住せしめることがその二であつた。

かくして始まつたのが、およそ紀元前五〇〇年頃における西ゲルマン人の移動である。かつてギリシア人がその歴史の初め、最初は東へ、次では西へと移動するを餘儀なくされ、またオスカー人がイタリアに押しよせて行つたと同じやうに、過剩人口化された西ゲルマン人は新たな住地を求めて移動し始めた。しかしライン及び上流ドナウに設けられたローマ人の障壁は固くして、この移動民族の大部隊はこゝにはたと喰ひとめられて、この附近に植民を始め、やがては深く閉された森林地帶に入つて、耕作を開始し、農耕の改良によつて、漸く、增加する人口に必要なる生活資料を獲得しえたのである。

しかし人口は增加してやまなかつた。今度は、エルベとウァイクゼルとの間に住んでゐた東ゲルマン人が、スラヴ人から脅かされることも手傳つて、南へ、南東へと移動を開始した。これが四世紀の長きにわたつて續いた・謂ゆる民族移動 Völkerwanderung である。この移動民族——それは他民族を脅かしたといふよりも、むしろ脅かされたものだつたが——しばしば飢餓と窮迫とに惱まされながら土地と食物とを求めて移動し、かくして新たなるヨーロッパ世界を創造するに至つたのである。

次いで行はれたのが、ハインリッヒ一世（在位九一九—九三六年）の意になつた大仕掛の東ドイツ人の植民である。その後ドイツの諸候達によつて西部においても行はれたが、これらは華々しい成果をもたらした。史家ラムプレヒトはこれを「中世期中のドイツ民族の偉業」と名づけたが、その原因は正に、當時の過剩人口、すなはち場所と食物とのための鬪爭にあつたのである。數百年の長きにわたつて人々は新しき住地を求めて國外に出た。武士と僧侶、市民と農民とが、妻と子と手持品とを携へて東方諸國へと移つて行つた。我々は今その數を正確に推算することは出來ないが、數十萬に上つたことは確かである。

かやうにして、ドイツ民族史上の顯著なる三事實——西ゲルマン人の移動、民族移動、及び東ドイツ人の植民が、すべて同一の原因に歸すること、すなはち狹隘となつた食物範圍——人口問題に歸することを知る。

次の世紀においても人口はやはり急速に增加して行つたが、この時代はむしろ、國內における自然の富源の開發利用の時代であつた。この時代の特徵的な事實としては、十三世紀頃まで絕えず行はれたドイツ國內の森

林地帶への植民、地坪の分割、ドイツ東部における人口の廣汎なる分布、都會への人口集中、等を算へることが出來る。その後ペストが流行し、農民狀態の惡化等のために、――十四世紀の中頃から國際貿易がドイツに盛んとなり、十五世紀にその繁榮期を示したけれども――人口增加の勢ひは一時停滯した。十六世紀に入つて初めて、（農民の蜂起はあつたが）事態は改善された、そしてこの狀態は三十年戰爭（一六一八―四八年）が起つて土地が恐ろしく荒廢に歸し人口減退の現はるゝまで續いた。十八世紀において人口は改めて增加し始めた。

十九世紀に入ると共に、全く新たな時代が現はれる。この時代を特色づけるものは、再びの大量の移民であるが、その形態は前時代のものとは異なる。こゝでは密集した部隊が故鄕を捨てたのではなく、個々の人間或ひは個々の家族が、他の地球部分特にアメリカへ、彼等の幸福を求めて移り行つた。尤もこの個別的な移住形態は、すでに十七・八世紀において行はれたところであり、十八世紀の終りまでにはその數二十萬に上ると推算されてゐる。この勢ひは十九世紀の二十年代から一層激しくなつた。尤もこの世紀の九十年代以降には、ドイツ國內における商工業が異常の發展を遂げたので、移民の傾向は停止し、却つて外國から勞働力の補給を受けるやうな狀態を現出するに至つたが、かゝる情勢の回轉が完了する前に、十九世紀中に祖國を捨てたドイツ人は數百萬の多きに上つた。これはドイツのみでなく、他のヨーロッパ諸國においても同じであつて、十八世紀末から近年に至るまでの間にヨーロッパ全土からアメリカに行つた移民の總數は五千萬人を超ゆると推算さ

れる。その數において、またその形態において、十九世紀における移民は舊時の移民と異なつてゐる、がその原因は同じであること、すなはちひとしく過剰人口を避けんとするにあつたことは、史家ラムプレヒトも論證する所である。

かくして我々は――と、エルスターはこのドイツ民族史の素描に締めくゝりを與へる、――最古の時代から現代に至るまでドイツ民族の移動の跡を一瞥するにおいて、常に恒に、過剰人口に歸せしめらるべき場所と食物とのための闘爭といふ一事に面接するのである、と(15)。

なほエルスターは次の個所でかうも概括してゐる。曰く、我々は、二千年以上にわたるゲルマン民族の移動を瞥見したが、これを一例として我々の觀取することは、人口の增加は經濟的發展に導くが、それが不充分となるか或ひは不可能となる場合に選ばれた途は、生活維持の制限か或ひは外に向つての移動であつたといふことである、と(16)。

(15) Handwörterbuch der Staatswissenschaften, Bd. II, 4. Aufl. S. 812—815.

(16) Ebenda S. 815. 傍點引用者。

以上エルスターの所說によつて見れば、彼れは民族の歷史をとにかく一貫的に說明し、「場所と食物とのための永久の闘爭」として描寫した。けれども第一、こゝで取扱はれてゐる歷史的事件は高々、民族の移動や移民で、全般的歷史の說明では元よりない。第二に、人口增加が經濟的發展に導く動因とされてはゐるが、その

「經濟的發展」の內容は明かならず、そのうへ歴史上種々異なる社會的發展段階の移りゆきが毫も說かれてゐない。むろんエルスターはこの小論稿においてかゝる意圖を果たさうとしたのではなく、單に人口問題の永久性すなはち人類と共にある所以をゲルマン民族の歴史に徵して擧證せんとしたのに過ぎないから、それ以上を求めることは求める者の無理である。だが、それにも拘らずエルスターの所說は、前にマルサスを尋ねて滿足なる回答を與へられなかつたところの・かの人口の「進步的」側面を、たとひなほ one-sided な歴史叙述の形を透してであるとはいへ、かなりはつきり前面に持ち出してゐると謂はねばならない。すなはち、人口の不斷の增加傾向が民族の發展に對する主動力となるといふ一面が描出されてゐるのである。

エルスターと共に、マルサスの正系を繼ぐ人口論者にモムベルトがある。前に指摘した彼れの近著『人口論』は、謂ゆる「人口と經濟との關係」の歴史的、理論的研究としては正に近年における最大の收穫と稱しうる。その所論は到底この一文において紹述し得ないが、右の問題に對する彼れの態度だけを指摘するならば、やはりエルスターと同じやうに、「すべての歴史において人口增加はすべての經濟的並びに技術的進步の最强の動力であつた」(17) ことを承認し、この點に關するリストやオイゲン・デューリングの不當なるマルサス攻擊を辯じて「これらの論者が主張したこと、すなはち個々の生產段階は種々異なる人口維持力をもつとの考へは、たとひそれほど嚴密な表現を得たのではないにしても、マルサスが夙に知悉してゐたところである。何はおいてもマルサスは、人口增加そのものが强く經濟を促進するの傾向を、不充分な仕方で考察した。この關聯を彼

れは重視しなかつたのである」(18)と述べてゐる。

(17) Mombert, Bevölkerungslehre, S. 476.

(18) Ebenda S. 471.

かゝる根本的態度を持するモムベルトの詳密なる歴史的叙述(その著の前半を成す)から、我々が多くの便益と示唆とを受けうることは云ふを俟たない。けれどもこれを通讀して受ける印象は、おそらくエルスターの場合と左程大きい隔たりはあるまい。いかにもモムベルトは、個々の民族・個々の時代について、その時々に存したる人口と經濟との相互關係を明かにし、しかも時代と共にこの兩對手が相互に制約し合ひながら、より低きよりより高き段階へと人類社會を押し進めて行つた跡を示してはゐる。けれども、彼れはむろん、人類歴史の嚴密なる發展段階を區劃したわけではなく、まして一の段階から他の段階への、或ひは同じことであるが、一の社會から他の社會への發展過程において、人口增加がどういふ役割を演ずべきかを定式化したのではないのである。

四、ボグダーノフの歴史解釋と發展動力觀

ところが、こゝに一見不思議と思はれることは、以上の論者とはその學問的立場を全く異にするボグダーノフが、右に述べたやうな意味において歴史發展の動力として人口を認めてゐることである。彼れの一著『經濟

科學概論』(19)は、周知のとほり、比較的程度の低い讀者圈の需めに應じて經濟學の大綱を傳へんとしたものであるが、外見的にはむしろ一つの歴史書たるの觀を呈してゐる。といふて、それはむろん年代的な歴史書ではないが、原始社會より現代に至る・いな將來社會に至るまでの・あらゆる社會の基本形態を捉へ、生産關係の變遷、及びそれに應じたる觀念形態の變革を叙述したもので、謂はゞ一つの「歴史的」經濟學、或ひは「理論」經濟史の一體系である。然らば彼れは、いかなる仕方で歴史を說明し、いかなる意味で重點を人口に置いてゐるのであるか?

(19) ボグダーノフ『經濟科學概論』林房雄・木村泰一兩氏譯　改造文庫版。
同上イギリス版——Bogdanoff, A Short Course of Economic Science, transl. by Fineberg, rev. ed. London 1925.

彼れは先づ人間社會の發展を三大時代に區劃し、それを更に諸段階に細別してゐるが、これを表示すると次のとほりになる。

一、自然自足社會 Natural Self-Sufficing Society

1. 原始種族共産主義 Primitive Tribal Communism
2. 權威的種族社會 Authoritarian Tribal Communes
3. 封建社會 Feudal Society

二、商業社會 Commercial Society

1. 奴隷制度 Slavery System

2. 都市手工業制度 Town Handicraft System
3. 商業資本主義 Merchant Capitalism
4. 工業資本主義 Industrial Capitalism
5. 金融資本主義 Finance Capitalism

三、社會的に組織された社會 Socially Organised Society
（即ち社會主義社會 Socialist Society）

第一時代の自然自足社會は、總じて「自然に對する鬪爭における社會人の微力、個々の社會團體の狹少、社會關係の單純、交換の缺如又は未發達、及び社會形態の極めて緩慢な變化」等によつて特徴づけられてゐるが、そのうちの「原始種族共產主義」が次の「權威的種族社會」に發展する動力は、技術でもなければ思考の發達でもない、むしろそれは極めて消極的・保守的だつた、その保守性を打破せしめたもの、それを發展的ならしめたものは人口の增加であつた、とされてゐる。すなはち曰ふ、

「故に生產形態の組織物たる思想及び觀念の一般的保守性が、經濟的發展が極度に遲々として進まなかつたことの原因であつたことは、全く明らかである。たゞ、人間に對する自然的な强大な力のみが、原始的イデオロギーの不活潑性、保守性を打破して、將來の發展の刺戟となることを得た。その力は即ち絕對的人口過剩 absolute over-population であつた。」（改造社版四七頁、English ed. p. 24）

「原始社會の發展の原因は次の如くである、すなはち生產形態が不活潑である結果、早晚不可避的に、絕對

的人口過剰が起こる、そして逆に、後者が前者の不活潑性を打破する。原始的社會心理の極端な保守性のために、技術の進歩は、殆んど常に、人口の增加に曳きずられて行き、生活資料の不足は、一般的に言つて慢性的である。」（改造社版四九頁、English ed. p. 26）

かやうにして、絶えず人口の增加に促されて當時の生産手段――狩獵の武器と方法とが徐々に完成される。同時に農業と牧畜とが始まつて、從來はたゞ偶然に且つ一時的に存し得たにすぎない餘剰勞働が、今や永久的の現象となつてしまひ、社會の一部のものが肉體的勞働から解放されうる條件が完備する。こゝにおいて成立したのが「權威的種族社會」であつて、この社會の生産關係は前の原始的共産主義のそれと比較すれば、「勞働の組織と實行との分化、集團の內部（及びこれより程度は少いが集團と集團との間）における、協業と分業との發達、及び餘剰勞働の存在の結果としての無組織的分業形態（すなはち交換）の役割が次第に眼立つて來ること」等によつて特徵づけられる。だがこの時代の發展力は、やはり人口過剰である。當時のあらゆる社會意識は發展を妨げたが、この障碍を打破したのが人口增加である。

この「時代の社會意識が、本質的には、人類生活の前段階におけると同じく發展の自然的な障碍であつたことを思へば、社會進化の原動力もまた同じく絶對的人口過剰といふ自然力でなければならなかつた。人口增加が生活資料の不足を惹き起した程度だけづゝ、保守的慣習は滅びざるを得なかつた。技術は改良され、社會關係は變化した。」（改造社版六七頁、English ed. pp. 42—43.）

人口增加が技術を促進し、權威的（族長的）種族社會を發展せしめたが、その社會はまた同じ動力で「封建社會」に推移せしめられる。念のために云ふが、ボグダーノフがこゝで封建社會と稱するのは、東方及び古代世界においてはキリスト紀元數世期前に、西歐では五世紀から九世紀にかけて、すなはちローマ帝國の末からシャールマン帝國の滅亡期にかけて、發達したもので、その最盛期はむろん十、十一世紀の頃とされてゐる。この社會の經濟的構造は、概括すればかうである。――技術の發達の低い農業生産（工場制手工業は未だ發達してゐない）を基礎として、小さいが併し甚だ緊密な自然經濟的（自足的）組織たる農業コムミューンを生じた。そしてその場合の生産及び分配の組織者は領主であつた。領主は軍事的必要から他の領主に條件付の服從をなし、複雜なしかし不安定な君主制を構成した。他の一般的社會的組織機能は僧侶によつてみたされた、特に分配の領域でさうであつた。しかし彼等の立脚する基礎は諸候と全く同じであつた。交換は集團と集團との間に、時には國と國との間に、行はれた、が規則的ではなかつた。

かくてボグダーノフは、封建社會における發展の原動力とその傾向を指示して曰ふ、

「封建時代の極端な保守主義は、種族團體の保守主義ほど頑强ではなかつたが、やはり同じやうに、强大な力の作用の前には屈服せざるを得なかつた。この力は絶對的人口過剩であつて、これは技術の進歩がなかつたこと、及び社會の要求を滿足させる手段が不充分だつたこと、の結果として生じたものである。（改造社版九六頁、English ed. p. 67）――人口の過剩、すなはち土地の不足から封建時代の戰爭は起こつた。それが國際的な

規模にまで行はれたのが十字軍である。この戰爭はどういふ結果を生んだか。先づ被征服國の生產力を破壞した、そして新たなる過剩人口をその國で生んだ、が征服國ではその吐け口になつた。と同時に交換が發展し、東方の諸文明國民から新技術、特に農業技術や工業化學や航海術やが傳來した。この生產力の發展は、交換の擴大と相俟つて、やがて自然自足社會の最終段階たる封建社會を覆へして行くのである。

以上はすべて自然自足社會に屬する三つの段階についての發展動力の詮索であつた。そして我々は、その何れの段階についてもボグダーノフが、人口增加を究極の發展力としてゐるのを見た。今や進みて商業社會の各段階——奴隷制度・都市手工業制度・商業資本主義・工業資本主義・金融資本主義——に關する說明を一瞥するのであるが、こゝでは、前の自然自足社會におけるとは一見異なつたる發展力が指摘されてゐる。それは競爭である。すなはち都市手工業制度の章下でボグダーノフは曰ふ、

「都市手工業制度の時代に、一つの新しい原動力が發生した——即ち競爭である。個々の企業は市場において、それぞれ自分に好都合な地位を確保しようと努めた。そのためには、その商品の生產に必要な勞働量を切りつめること、換言すれば、勞働の生產力を增加すればいゝ。このことから、經濟的發展の最も重要な原動力たる技術の發展が起こる。尤も社會生活のこの發展段階においては、競爭の發展は微々たるものであつた。それは手工業ギルド制度が、あらゆる方法によつて競爭を制限してゐたからである。しかしギルドが競爭を防ぐためにそんな方法を採つてゐたといふこと自身がすでに競爭が存在してゐたこと、及びそれと戰ふためにこれ

らの方法をとることを必要とする程に競爭の勢力が大であつたこと、を示すものである。ギルドの構造は、競爭を全然防止するといふことは出來なかつた。競爭は次第にこの構造を堀り崩して行き、つひに破壞してしまつた。」（改造社版一七五―一七六頁、English ed. p. 132）

次に商業資本主義時代――「商業資本家社會の根本的原動力は、すべての交換社會（＝商業社會）における と同じく、競爭であつた。途上に横たはる障碍――封建的・ギルド的勢力、國家による極端な商工業の干涉等――が弱くなり消滅するに伴ひ、競爭の作用は、ますます明瞭となり尖鋭となり、社會の發展は一層急速となつた。」（改造社版二一三頁、English ed. p. 163）

更に工業資本主義及び金融資本主義の時代においても、やはり競爭が發展の主動力として前面にもち出されてゐる。けれどもそれは企業家・資本家の側におけるものであつて、それと同時に勞働者階級の反抗――階級鬪爭――が重視されてゐることは言ふまでもない。試みに、階級鬪爭には直接に觸れない一二の關係章句を引用すれば、

「それ自身、生產力の尨大な發展の當然の歸結であつた近世資本主義は、自己の發展の道を開拓して行く。產業を追ひ進める最も有力なる力は果して何であるか？ 我々は、それは資本主義が未だ最近の段階に入つてゐない各地を支配してゐる・無制限の競爭であることを知つた。この競爭において、勝利は最も低廉な財貨を市場に供給し得る人のものであり、且つ、生產費の低減は、第一に技術の發展並びに、生產商品量の增加によ

つて成就される。であるから、競爭は生産の擴張、從つて生産力の增大に對する有力な刺戟として役立つのである。競爭は廢止され、産業が獨占狀態に入るや否や、發展は妨げられ、技術的改良の進歩は抑制される。」（改造社版四五九頁、English ed. pp. 368—369）

「競爭は資本主義發展の機關車である。もし競爭が休止するならば、發展は行き詰り、資本主義は沈滯する。ウラル工業の場合は即ちこれであつた。が、このことは現在、世界資本主義制度を通じて到る處に起こつてゐる。」（改造社版四六〇頁、English ed. p. 369）

最後にボグダーノフは「社會的に組織された社會」（＝社會主義社會）を取扱ひ、そこでの發展の動力をも論じてゐるが、これは、資本主義社會から社會主義社會への推移過程の說明と共に、省略しよう。そして以上二つの、人類史上の大きい時代別、すなはち自然自足社會と商業社會とについてのボグダーノフの發展動力觀を、彼れ自身の言葉をもつて要約すれば——「自然自足社會、種族社會、封建社會等の發展の原動力は『絕對的※人口過剩』であつた。それは自然と社會、すなはち人口の增加から生ずる生活資料に對する需要の增加と、自然が一定社會に供給し得る資料の額との間の外的矛盾 outward contradictions に基づいてゐる。」しかるに「交換社會（＝商業社會）の發展の原動力は『相對的人口過剩』（＝産業豫備軍）、競爭、階級鬪爭、すなはち實は社會生活の內在的矛盾 inherent contradictions である。」（改造社版四八二頁、English ed. p. 389）

※ イギリス版にはこの語 "relative—" とあり、むろん "absolute—" の誤記なるべし。

かやうにしてボグダーノフは、商業社會に至るまでの自然自足社會の三段階の發展を、對生活資料との關係における「絶對的過剰人口」から說明し、商業社會の各段階の發展を競爭及び階級鬪爭から、而して特に競爭に重點を置いて說明した。この競爭は絶對的な人口增加といかに關係するか、さらに進みては、およそ商業社會においては人口增加は何等の發展的役割をも演ぜざるべきか、等の問題に對してはボグダーノフは些かも觸れなかつたとはいへ、少くとも自然自足社會をかくも明瞭に人口の壓力から說明して行つたこと自體がすでに我々の興味をそゝるに充分であると謂へよう。若し夫れ、彼れが商業社會における「新たなる發展力」とせる「競爭」が、たとへばダーウィンの着想がマルサスより得られたるが如く、不斷に增加する「人口」と密接なる脈絡を有することが論明せられ得たでもあらうならば、我々の興味は一層大きかつたに違ひない。

五、得られたる諸結果と問題究明への方途

以上私は、極く限られたる・しかも恣まゝなる二三の文獻資料を題材として、間々私見を加へながら記述を進めた。當初より單に一つの論題を提供しようとする以上には出でなかつた本文は、すでに右においてその直接の意圖だけはこれを果たし得たわけであるが、最後に一節を附加して、前述せるところより得られたる諸結果を總括し、なほ試みに、私見による本問題究明への方途を指示しておかう。

私は先づマルサスに溯つて、そこに、人口についての二つの相反する思想——すなはち一は、人口が食物に

よつて規制せられ・前者の增加傾向が後者の既存の範圍内に抑止せられることから、人類社會の幸福への進歩が阻碍せられるといふ考へ、今一つは、人口の不斷の增加傾向は逆に食物範圍の擴大に刺戟的作用を與へ、人類社會の幸福への進歩を促進するといふ考へ――の並び存することを見た。そしてこの人口の受動的及び發動的の二側面は、合はせて一つの運動、謂ゆる「幸福（或ひは人口）に關する退歩的及び進歩的運動」として、しかも周期的に反覆されるものとして把握せられてはゐるものゝ、マルサス自身の叙述のうちではこの運動がやがて全體として人類社會の發展に導いて行くものとは說かれず、それどころか、むしろこの運動の退歩的側面が人類史上の個々の段階について專ら强調せられてあることを、私は指摘した。從つて彼れの所論は全體として、我々の當面の主題に對してはむしろ反對的な態度を表明してゐるのではあるが、一方における現實の歴史の發展と他方における人口の增加とを合はせ考へるとき、彼れが輕視した人口の發動的・進歩的側面こそ重視せらるべきであり、そしてそこから歴史解釋上の新たなる一見地が拓かれ得るかに思はれる。

何はおいても、マルサスには發展概念が缺如してゐた。從つて彼れは、進轉逆轉の人口擺動といふ重要なる思想を把持してゐながら、これを辯證法的に理解するすべを知らなかつた。人口は食物によつて抑止せられ、逆にまたそれを反撥しながら、その運動と共に人間社會は押し進められて行く、といふ風には說き得なかつた。――彼れ以後の人口論者、特に近時においてはエルスターやモムベルトは右に謂ふ人口の進歩的側面を重視し、人口運動と經濟的發展との緊密なる相關關係を史的に實證しようとした。けれども、彼等にはまた、謂

ふところの經濟的發展の內容が明かならず、歷史上種々異なるべき發展諸段階の嚴密なる區別を先行せしめてその段階相互間において演ずべき人口の役割を究明しようとはしなかつた。ボグダーノフはこれを試みた、だが彼れは、「商業社會」に至ると共に、「歷史發展の動力としての人口」を拋擲した、そしてそれに代へて「新たなる原動力」をもつて來たのである。

これが、得られた諸結果である。「人口」はつひに歷史發展の究極の動力たり得ないか?——最初の問題は依然としてこゝに殘つてゐる。

思ふに、人類歷史の發展過程は、もとより一本の、直線的な、漸次的な、變化の連續線ではない。それは、ある時は元氣なく爬行し・ある時は强暴に疾驅するが如く、前行狀態の漸次的な變化は一定の時點において急激な質的變化を喚び起こすものである。一言にして、歷史は辯證法的な發展を遂げる。そのうへ、人類歷史の各段階は決して同質的な社會型をもつては現はれず、ある段階は階級なき・ある段階は階級ある社會として自からを具現する。かゝる人類史上の各段階の異質性と、及び個々の段階ならびにその相互間における非漸次的な發展過程とを前にして、「人口」といふが如き本來自然發生的な一要素をのみもつてこれを一貫的に說かうとするのは、一應、初めから明白な不可能事であると謂はねばならない。その體制を全く異にする「自然自足社會」と「商業社會」とで發展の原動力を變へたボグダーノフの態度は、この意味から充分に首肯し得られる。同時にまた彼れが、自然自足社會の發展を「過剩人口」から說く場合でも、この過剩人口が直接に次の社

會段階への途を拓くといふのではなく、またかゝる發展の一定の方向を指示するといふのでもなく、かゝる役目を演ずるのはどこまでもその時々の物的な生産諸力であつて、過剰人口はたゞこの生産諸力の發達に對する主彈條となる、といふ意味に過ぎないこともまた承認せられねばならない。

けれども、私は思ふ。これらの事は、なほ、人口をもつて歴史發展の主動力となす一見地の可能性を全幅的に拒否するものではない。上掲の諸論者がこの見地に徹し得ず、或ひは部分的にしかこの見地を歴史解釋に適用し得なかつたことの一つは、つねに「人口」を單なる量と解し、本來そのもとに包攝されてゐるべき特定の質を遊離し去つたことに由來してゐるが如くである。從つて「過剰人口」は、つねにまた、與へられた食物範圍との關聯において、すなはち「絶對的過剰人口」として理解せられた。このことは特にボグダーノフについて云へる。しかしこれが、人口及び過剰人口の、唯一の概念規定の途でないことは、近代社會において人口の總數が必ずしも增加せざるになほかつ「過剰人口」を云爲し得るに徴しても明かである。むろん人口は、それがかゝるものとして把握せられてゐる限り、つねに一定の數量的大いさにおいてである、けれどもこの人口は特定の質を離れて存しない。人口は量であると同時に質を有してゐる。――序でに附言するが、この意味における人口概念から社會の基礎構造を説明し、以つて一つの特異なる史觀を創らうとしたのは高田博士の謂ゆる「第三史觀」であるが(20)、私見によれば、これはなるほど人口中心の、從つて我々が上來求め來つた歴史説明の好箇の一例であるが如くに見えるにしても、それは僅かに社會の構造を人口の量と質とから説かうとした

に止まり、社會の發展には觸れられてゐないかに記憶する。それが一つの「史觀」であるためには、歴史の發展過程及び發展の動力こそ究明せられるを要しよう。本文が特別の注意をこの史觀に拂ふてゐない所以である。

（20）高田保馬氏著『階級及び第三史觀』

それはさておき、「人口」を主要契機としての歴史發展の説明は、人口概念のかゝる把握の仕方の相違から次の二つの方途において總括せられ得よう。一は人類の歴史を、富の蓄積・交換・私有財産・階級等の未發達なりし原始時代と、これ等のものが加速度に發達した文明時代とに大別し、人口の不斷の增加傾向が發展の原動力となつたのは前の時代だけで、後の時代では別の新たなる原動力が加はるとする途である。この途はボグダーノフが選んだもので、彼れにおける自然自足社會と商業社會との別は、こゝで我々が謂ふ原始時代と文明時代との別に略ぼ該當してゐる。この途はまた、ある意味において、老エンゲルスが抱持した經濟史觀的見地と矛盾するものでない(21)。けれどもこの説明の仕方は、我々の眼前に横たはる文明社會については「人口」を背後に押しやつてしまふの憾みがある。況んや人口の active な進歩的な側面は、この社會ではもはや何の役目をも演ぜぬものとして無視されてしまふ。そしてそれは人口の第一の見方、すなはち人口を單なる量とし、一般的な食物との對比において見る限り、當然に突き當らざるを得ない限界である。なぜならば、文明社會は同時に階級社會であり、この社會においては人口問題はもはや食物對人口といふ單純なる形態をとつては現は

れぬからである。

（21）拙稿『生の生産及び再生産について』商學討究第八卷上冊所載　參照。

これを生かす途は、人口を單なる量としてだけではなく、本來そのもとに包攝されてゐた特定の質を浮揚せしめて、人口問題を新たなる光りのもとに把握するにある。これが殘されたる第二の道で、「人口」に重點を置いた發展理論の成否は一に、この第二の途がどの程度にまで切り開かれ得るや否やに懸つてゐると思はれる。かつてシェフレは、人口は「血液を異にし、性を異にし、年齢を異にし、肉體的並びに精神的構造を異にする個人」（22）の總和であるとし、シュモラーは「人種、地域、及び歴史によつて成立せる人間の一團」（23）とし、またワグナーは「國民經濟的に觀察すれば、一定の國民經濟的地域における人口とは、その地域内において勞働の能力と意思とを有し而かも事實上勞働に從事せるもの、すなはち經濟財の生産のためにする經濟的勞働てふ要素の代表者である」（24）と規定したが、これ等の人口概念は、それぞれ異なつた仕方においてゞあるにしても、明瞭にその質的側面を浮揚せしめた若干例である。このやうな見地から近代社會における「人口」を再吟味し、同時にまた「人口の壓力」を單に人口數の量的增加からではなくその質の變化からも理解し始めるならば、人口をもつて歴史發展の根本動力となす見地の貫徹は必ずしも不可能ではあるまいと思ふ。

（22）Schäffle, Abriss der Soziologie, Tübingen 1906, S. 116.

（23）Schmoller, Grundriss d. allg. Volkswirtschaftslehre, I. Teil, S. 160.

（24）Wagner, Grundlegung d. pol. Oekonomie, Leipzig 1893, I, 2, S. 466.

但し私がかく云ふのは、人口には、たとひその概念が如何やうに解釋されようと、その時々の經濟狀態によつて規制されるといふ一面の儼存することを、拒否したのではない。この被規制者たるpassiveな一面は、特に近代社會において重要であつて、そこでは、あらゆる人口現象は經濟狀態の反映たるかの如き觀をさへ呈してゐる。一國の人口が量において如何に增減し、質において如何なる特殊性を保有するかは、歸するところ、その時々の經濟狀態に依存するのであつて、この點では人口現象もまた謂ゆる經濟史觀的說明の範圍外に出づるものではないのである。にも拘らず私が、人口をもつて歷史發展の主動力となす一見地の可能性を想望したのは、かゝる被規制者たるの一面を有する人口は、それが一定の量に達し・特定の質を保有するに至るとき、今度は逆に既存の經濟狀態に反作用を及ぼし、それを促進せしむるの主動力に轉化するといふ一面に着眼してのことである。

だが、いふまでもなく、かゝる見地の貫徹の能・不能が理論的に斷定せられるのは、さらに詳密なる史觀論的吟味を重ねての後であり、またそれが最終的に確證せられるのは、現實の人類歷史への廣汎且つ精密なる探査の後である。そしてこの點に到ると、かの「幸福に關する退步的及び進步的運動」の史的實證について洩らしたマルサスの所懷が、はからずも今、我々自身の所感として蘇つて來るかに覺える。その一節を次に引用して本文の結語に代へよう。——

「何故この擺動は我々が當然期待するほど充分に注意されず且つ經驗によつて斷定的に確證されなかつた

か。その主たる理由は、我々の有する人類の歴史が、概して上流階級のみの歴史に過ぎないといふことである。我々は、かゝる退歩的及び進歩的運動が主として生起する社會の風俗習慣については、信頼するに足る多くの報道を有して居らぬ。一國民及び一時代のこの種の滿足な歴史を作り上げるためには、幾多の注目者が絶えず綿密に、社會の下層階級の狀態と、これに影響を及ぼす諸原因とについて、地方的及び一般的觀察を行ふ必要があらう。そしてこの問題に關する正確な推論を導き出すためには、かゝる歴史家が數世紀に亘つて輩出する必要があらう。」(24)

(24) Malthus, Principle of Population, 6th ed. Vol. I. p. 19. 岩波版　上卷二六―二七頁。傍點引用者。